

難波宮跡をはじめとする上町台地の歴史遺産活用
に関する提言

平成 23 年 8 月 24 日

なにわ活性化プロジェクト委員会

(委員長：栄原永遠男)

難波宮跡をはじめとする上町台地の歴史遺産活用に関する提言

平成 23 年 8 月 24 日
なにわ活性化プロジェクト委員会
(委員長：栄原永遠男)

1. 提言の趣旨

大阪は、645 年に難波に都が置かれた日本でもっとも長い歴史を有する都市である。その足跡は、史跡難波宮跡や特別史跡大阪城をはじめ、市内各所に点在する遺跡・建造物・文化財などにとどめられ、博物館・美術館などの館藏品や寺社旧家などの所藏品も、その豊かな歴史を物語っている。

しかし近年、大阪は、芸能や食文化のまちというイメージが強調されて伝えられることから、歴史的な都市とは一般には認識されていない。また文化イベントなどさまざまな取り組みにもかかわらず、大阪の歴史や文化遺産への注目が集まるまでに至っていない。

ことに都市大阪の出発点である難波宮は、その高い歴史的価値にもかかわらず、市民にも十分に知られておらず、多くの労力と資金を投じて都心に保存された難波宮史跡公園（以下、史跡公園）も活用は十分とは言えない。

このような状況を打開するためには、大阪の歴史や文化の豊かさ、素晴らしさについて、大阪市民のみならず、日本中の人々、外国人に対して、わかりやすく、興味深く伝えることが重要である。また、難波宮をはじめとする史跡や文化遺産の価値を実感できるような展示を試みるなどして、多くの人々にその価値と重要性を訴えることのできる複合的な取り組みが必要である。

さらに、都市大阪の発展の中心的な舞台であった上町台地とその周辺に焦点をあて、時代とともに大きく変化した地勢や、自然環境の中で育まれてきた大阪の歴史や文化を、イメージ豊かにわかりやすく表現して国内外に発信することも大事であろう。

これらの取り組みにより、大阪の歴史と文化に対する理解を深め、市民の誇り（シビック・プライド）を育むとともに、大阪の観光魅力を高め、都市の活力を生み出すことができる考える。

以上の基本的な考えにもとづき、本委員会は文化庁の平成 23 年度「文化財を活かした観光振興・地域活性化事業」への申請に協力し、過日採択された。その申請書に記載した事業内容もあわせて、難波宮跡をはじめとする上町台地の歴史遺産を活用するために、以下の提言をまとめた。

2. 具体化への基本方針

次の3点を、本提言の基本方針とする。この基本方針に基づいて、具体的な提言を行う。

- (1) だれもが安心して利用できるように、難波宮跡の基本設備を整え、さらに利用者の理解を深めるための史跡整備を推進する。
- (2) より多くの人々に難波宮を知ってもらい、好きになってもらうために、さらなる事業展開や広報手法を創造する。
- (3) 難波宮をはじめ四天王寺、住吉大社、大阪城その他の上町台地の歴史遺産の一体的な活用のため、個々の歴史遺産と人材を相互に連携させる。

3. 活性化のための具体的提言

(1) 史跡公園の整備

ア. 基本設備の確保－安心して利用できる

史跡公園は、大阪城公園と一体化した歴史公園とする基本構想はあるものの、整備は進んでおらず、犬の散歩など一般的な公園として利用する人がほとんどであり、近年、新たに史跡に指定された広い地域も、空き地のままとまっている。

難波宮跡をはじめとする上町台地がもつ豊かな歴史遺産を十分に活用するためには、まず第一歩として、史跡公園の整備が前提となる。この点は、大阪市の財政状況の悪化等により立ち遅れているが、基本的な設備や案内表示、ガイダンス施設の整備充実について、早急に取り組むべきであることを提言する。

最も基本的な整備として、基壇付近に説明板を設置するなど、史跡公園としての位置付けを明確にするとともに、最寄り駅の谷町四丁目駅や森ノ宮駅を起点として、難波宮をめぐるルート地図やサインを整備するなどの工夫が必要である。

また、史跡公園内のトイレが旧式で快適に利用できるものではなく、さらに雨や直射日光を避ける休憩所が整備されていないことから、難波宮に関心をもつ人、ことに女性が安心して見学できる場所とはなっていない。街歩きなどの集合場所として利用するに際しても、基本的な設備として快適なトイレと休憩所は必要不可欠であり、早急に整備する必要がある。

大阪歴史博物館は、難波宮跡のサイト・ミュージアムとしても位置付けられており、この地域の文化的拠点施設である。その機能の充実等をはかることにより、難波宮跡を

はじめとした大阪の歴史遺産に対する関心を飛躍的に高めることを目指すべきである。

さらに、史跡としての難波宮跡については「難波宮跡公園整備基本計画」がすでにある、その着実な実行と、それによる史跡公園のメンテナンスが大切である。また、その後の状況の変化に応じて、柔軟に対応していくことも考慮されるべきであろう。

イ. 難波宮の整備の充実—理解してもらう

難波宮をより多くの人により深く理解してもらうためには、いくつかの工夫が必要である。第一に、多くの人が史跡公園に来たいと思う動機づけを用意する必要がある。第二に、史跡公園に来ることで難波宮という古代の都について新鮮な驚きを感じ、それとともに理解を深めることができるようにする。第三に、そのことに楽しみや充実感を感じてもらふことである。以上の結果として、第一の動機づけがさらに強化されるという循環が望ましい。

整備基本計画と一部重複するが、難波宮をより深く理解してもらうために次の三点を提言する。

一つ目は、一定の見晴らしが得られ、同時に遺跡を紹介・解説するガイダンス施設（例えば楼閣風に復元される八角殿を改造するなど）を史跡公園内に設置することを提案する。史跡公園を訪れた人々に難波宮をより理解してもらうには、現状の遺構表示を活用するとともに、ガイダンス施設を設けて説明することが必要である。

古代難波宮には多くの宮殿建物があつたことから、その全体を見わたし、広い範囲で理解することが必要となる。大阪歴史博物館の10階からは史跡公園が遠望できるが、これに対応して公園内にもより近くで広く見わたせる機能をもった施設が求められる。さらに、ガイダンス施設を活用したボランティアガイドによる解説などを組み合わせれば、難波宮の理解向上に大いに役立つ。

二つ目として、今日、急速に普及しつつあるスマートフォンなどの携帯端末を活用した解説システムの構築がある。広い史跡公園内に遺構表示が分散するため、それぞれの表示の意味や発掘成果、歴史的な意義などを伝えるには、個人がもつ端末に表示することが効果的である。

拡張現実（AR/ *Augmented Reality*）という技術を使い、現在の遺構表示を活用した画面上での難波宮の立体復元や、古地形・古植生などの自然環境復元、宮廷儀礼や習俗の映像復元など、最新の研究成果を「現地で提供」することができるようにする。それを来園者が自由に選んで見ることで、難波宮についての思わぬ発見ができるようにする。

三つ目として、史跡公園の周辺にも重要な遺構や遺物が発見され、保存・表示されている場所が点在しており、これらを活用する。携帯端末を使えば、周辺の情報も柔軟に提供することが可能となる。

特に大阪歴史博物館は難波宮跡のサイト・ミュージアムであり、史跡公園と一体化した展示をめざしている。博物館の常設展示でも携帯端末を活用した新たな情報システム

を構築することが望まれる。10階展示室からの史跡公園の眺望や、地下に保存された遺構のガイドツアーにAR技術を組み合わせることで、実物による復元だけでは実現できないさまざまな情報を提供することができる。

(2) 難波宮に関する広報と事業

ア. 難波宮に多くの人々が集うー知ってもらおう

多くの人々が史跡公園を訪れるようにするには、難波宮を知ってもらうことが必要であり、まずは地道な取り組みが求められる。対象は、大阪市内の住民、その中の生徒・児童などの子供たち、府民や他府県の人々、日本人観光客、外国人観光客などである。

全対象に共通することとして、①既存のイベントと連携した広報戦略、②大阪歴史博物館、大阪城天守閣・大阪城公園などの周辺施設との連携と一体化、③日常的な情報提供、これらを繰り返し行っていく必要がある。

現在、史跡公園では「中央区民祭」や「大阪あきない祭」、「中秋明月祭」、「四天王寺ワッソ」、市民団体によるボランティア清掃活動など各種のイベントが行われている。それらの機会には、より一層、難波宮と史跡公園を積極的に宣伝するとともに、このような催しを増やしていくべきであろう。

また、難波宮跡のサイト・ミュージアムである大阪歴史博物館とは、常設展示やガイドツアー「難波宮遺跡探訪」、その他の催物などを活用した、より緊密なアクセスをはかる必要がある。さらに、大阪城天守閣・大阪城公園とも一体的なイベントを行うほか、観光・イベント会社などとタイアップした催物の企画と広報を考えることができよう。

こうしたイベントの情報とともに、ガイドンス施設や携帯端末に上げる難波宮の歴史情報を含めた、難波宮に特化したWeb上のコンテンツを開発し、日常的に更新して提供すれば認知度を上げることができよう。

次に、子供たちへの教育を重視したい。大阪市民として子供の時期から難波宮を知り、難波宮に親しむ機会を用意すべきで、そのために大阪市教育委員会と協力した学校教育との連携が必要である。毎年実施している難波宮跡体験発掘や、生徒・児童向けの『大阪事典』の活用、学芸員による出前授業など、すでにある行事や本などを十分に活用しなければならない。特に体験発掘は、実地に難波宮に肌でふれることができる貴重な機会であり、子どもたちが成長した後も長く感動が持続されると考えられる。期間や参加校の拡大を工夫してほしい。

また隣接する大阪城天守閣・大阪城公園は、多数の外国人観光客が集まる市内でも有数の場所である。難波宮が国際都市大阪の原点であることを紹介するためにも、これらの外国人観光客の誘導は必須の課題である。そこで、外国語に堪能なボランティアガイドを養成し、ガイドンス施設や携帯端末に提供する情報の多言語化をはかることにより、難波宮の魅力を紹介することが必要である。

このような活動を通じて、大阪市内外の成人や子供、外国人観光客などさまざまな人

が史跡公園に集まり、にぎわいを増すことによって、郷土の歴史への愛着が生まれ、地域の人々が誇れる大切な場所に育っていくことであろう。種々の催物や最新の歴史情報が随時あり、それを選択的に利用でき、さまざまなニーズに応えることで、難波宮を訪れることが個々人の楽しみとなり、繰り返し来園することにつながっていくと期待される。

イ. 難波宮に活動団体をつくる－好きになってもらう

現在、難波宮ではいくつかの市民団体が活動している。隔月の「難波宮 DE ゴミ拾い」、7月28日（なにわの日）の「難波宮フェスタ」、20年以上続くガールスカウト大阪府支部による清掃奉仕などがその代表である。また、植物観察、鳥の撮影会など、史跡というより広場や緑地として利用されている例も多い。

難波宮活性化のため、このような活動を行う数多くの人々の存在は重要であり、それらが連携して大きな力となっていく流れをつくるのが大切と考える。

具体的には、まず史跡公園の案内ガイドが考えられる。案内ガイドによる解説によって、遺構の表示や復元を補い、来訪者の理解を深め、感動を与えることができる。案内ガイドは、これまで自発的に活動してきた上記団体の人々を核に、新たに公募する。

第二に、難波宮への関心を呼びこみ、核となるファンを増やし、案内ガイドを養成するために発掘調査の活用を提案する。

公園では、史跡整備の現場において毎年小学生の体験発掘が続けられ、13年間にのべ8,000人を超える子供たちが参加した。ここに一般の人々の体験発掘も加え、彼らの参画による調査に展開する。そのためには期間も長く、人手もかかり、費用も嵩むことになるが、他よりの資金獲得、発掘ボランティアの活用などの方策が考えられる。参加者を母体として案内ガイドに移行するができれば、ガイドのモチベーションの高さと難波宮への愛着、机上の知識だけでない解説の説得力など、他の遺跡の案内ガイドにまさる特色を出すことができる。

また、発掘調査は常時公開をめざすべきである。この期間、いつでも見学ができ、成果をブログ等で刻々伝えることができれば、市民の目を難波宮に向けることができる。史跡公園での催物や、ウォーキングなど他の催しとのタイアップもできる。これには、調査主体である大阪文化財研究所・大阪歴史博物館、大阪市教育委員会、大阪市ゆとりとみどり振興局の連携・緊密な協力が必要である。

以上の企画を実行しながら、市民、地域住民などで構成される「難波宮応援団」のようなものが形成できれば、「難波宮好き」の輪を広げる強力で恒常的な活動団体となる。

ウ. 難波宮をシンボライズする－市民・国民へ印象付ける

平城京では大極殿が復元され、大阪城には天守閣と石垣がある。難波宮にもシンボル、

象徴がなければ、大阪市民、まして他府県の人々や外国人の関心を難波宮へ向けることはむずかしく、的確な広報戦略も立てにくい。

現時点では、難波宮跡に建物を復元する具体的な計画はなく、公園の整備も停滞している。しかし、このような状況のもとだからこそ求心力となり得るシンボルを生み出す知恵が求められる。そこで、二つの切り口を提案したい。

第一に、難波宮のミステリアス性をクローズアップさせる。難波宮は幻の都と呼ばれ、長らく所在すらわからなかった。20世紀後半、日本のかつての首都の中で新しく発見され、大都会の真ん中に忽然と姿を現した。そこで、「幻の都」「発見」などをキーワードに、想像力に訴え、物語性と遊び心を加味したシンボルを作りたい。公募によるマスコットキャラクターやキャッチコピーの創出も、イメージ戦略として有効だろう。

例えば、イルミネーションで夜に浮かび上がる大極殿を短期間だけ史跡公園に出現させるとか、遷都時の史実とからめて12月に無数のキャンドルを灯し、大極殿院前のヒマラヤ杉をイルミネーションツリーとして輝かせるなどの演出が関心をひく可能性がある。

また、各地の世界遺産化の動きのように、難波宮跡の特別史跡化という具体的な目標を掲げることも、多方面の人々を結集させる旗印となろう。

二つ目に、防災との関係を重視する。都心の、しかも高台に広大な空間が確保されている。災害時の避難場所として、「何かあったら難波宮に集まろう」、そこは「大阪と日本の原点」という位置付けは訴える力があり、公園での大きな催しにも有効であろう。

史跡公園の整備に、避難場所としての各種設備を加えることを検討すべきである。また一例として、難波宮を目指した各区・近隣からのウォーキングを阪神淡路大震災の1月17日や東日本大震災の3月11日に一斉に行い、コースに近所の避難場所や名所旧跡などを組み込む企画（現代のなにわ道防災ウォーク）など、さまざまな工夫が考えられよう。

（3）難波宮・大阪城・四天王寺・住吉大社、上町台地の歴史遺産の一体活用 ア. 場所をつなげる

難波宮が立地する上町台地上には、大阪城・四天王寺・住吉大社をはじめとする多数の歴史資産が存在している。これらは相互に深く関連した存在であり、地域ごとに個別に活用するだけでなく、一体的に活用していくことで、よりダイナミックな大阪の歴史を体感することが可能になる。

具体的には、まずこれら上町台地の歴史遺産を知ってもらうために、上町台地とその周辺をカバーする「歴史体感マップ」と、各地域を特徴づける「上町台地歴史エピソード集」などの基礎的資料を作成する。それをさまざまな事業を通じて多くの人々に配布し、周知をはかる。さらに、上町台地の歴史・文化にかかわるポータルサイトを構築し、関係情報を随時発信していくことも必要である。

これらを利用した上町台地を縦断する歴史ウォークは、区や地域を越えた広域的な事業である。これに参加した人々に、地域の相互理解を深めてもらうとともに、歴史を軸にした地域のつながりを体感してもらう。これは、大阪の成りたちへの深い関心と呼びおこすことに有効であろう。

イ. 人をつなげる

このような事業推進の担い手の第一は、大阪市各区・地域でくらす住民であり、特に地域に根ざして活動するNPOなどの市民団体である。また、区役所・区民センター・図書館・学校などの公的な機関のほか、住吉大社・四天王寺その他の寺社や商店街・NPOなどの民間団体も、地域の環境整備や活性化に寄与している。

これらの住民・諸団体・公的機関が、広く連携・協力関係を築いて、連携を深めながら事業を推進していくことが重要である。それによって初めて、広範な地域からの来訪者の増加、地域間の活発な人の動きが生まれ、開放的で活気ある地域社会づくりが実現できるであろう。

その場合、歴史・文化遺産をあつかう博物館・研究所の学芸員、大学の教員が、専門的な知識・情報を提供することで、より質の高い事業の実践が可能になり、成果が期待できる。

この連携・協力関係を構築していくにあたって、これらの人々が中心的な役割を果たす必要がある。さらに、市民団体等を結びつける専門のコーディネーターの援助を得ることも必要であろう。

また、上町台地の歴史・文化情報を各地域から発信するポータルサイトは、各地域の機関・団体、そして住民をつなぐ有効なコミュニケーションの場である。これにより、地域相互の連携を継続的に維持し、人々をつなげる手助けとすることも有効である。

4. 結び

大阪市および大阪市博物館協会は、大阪歴史博物館、大阪城天守閣、大阪文化財研究所などをはじめ、住吉大社・四天王寺その他の貴重な文化遺産を有する諸寺社・諸施設、大阪市立大学などの諸大学、地域の市民団体やNPO、経済界、マスコミ関係者等が連携して、従来の枠を超えた新しい取り組みが実現できるように、積極的に対応されることを期待する。

また、以上に述べてきた具体的提言について、当面の取り組み、中長期的な取り組みに分けて整理した。大阪市、大阪市博物館協会および関係者は、これを目安として実現にむけて努力されたい。

(1) 当面の取り組み

a. 史跡公園の整備

トイレ・休憩所の整備

遺構説明板の設置

サインやルート地図の整備

b. 史跡公園・大阪歴史博物館における事業、広報等

史跡公園での携帯端末を活用した解説と周辺の文化遺産情報とのリンクシステムの開発

既存イベントとの連携

大阪歴史博物館とのアクセス強化

難波宮に特化した Web による情報提供

児童生徒への難波宮授業などの連携強化（体験発掘、大阪事典、出前授業など）

マスコットキャラクターやキャッチコピーの創出

AR 技術による大阪歴史博物館の展示改善

端末・展示情報などの多言語化

c. 上町台地歴史遺産の一体活用

歴史体感マップ・上町台地歴史エピソード集の作成

上町台地縦断歴史ウォーク

ポータルサイトによる情報発信

(2) 中長期の取り組み

a. 史跡公園の整備

ガイダンス施設の設置

b. 史跡公園・大阪歴史博物館における事業、広報等

携帯端末による解説での内容充実

案内ガイド、外国語ボランティア

市民発掘とボランティア養成

大阪城天守閣・大阪城公園と一体的イベント実施

観光・イベント会社とのタイアップ

難波宮をシンボライズする催しの実施と継続

（例：イルミネーション、12月イベント、現代のなにわ道防災ウォークなど）

AR 技術による大阪歴史博物館の展示改善の進展

端末・展示情報などの多言語化の進展

c. 上町台地歴史遺産の一体活用

上町台地縦断歴史ウォークの定着

ポータルサイトなどによる情報発信の拡大

上町台地各地域の団体の連携強化と「難波宮応援団」の立ち上げ

<資料>

委員会の記録

第1回

平成22年11月25日（金）午前10時～12時 大阪歴史博物館第1会議室
・趣旨説明、今後のスケジュール、難波宮跡などの活用の現状、今後の検討内容

第2回

平成23年1月26日（水）午前10時～12時 大阪歴史博物館第2研修室
・活用の問題点抽出、本委員会の目標、現在の難波宮整備案、文化庁「文化財を活かした観光振興・地域活性化事業」申請に向けたプラン作成へ向けて

第3回

平成23年3月8日（火）午前10時～12時 大阪歴史博物館第2研修室
・文化庁申請事業を含む難波宮などの上町台地の歴史遺産活用策の検討

第4回

平成23年4月13日（水）午前10時～12時 大阪歴史博物館第2研修室
・文化庁申請事業案の内容検討

第5回

平成23年7月6日（水）午前10時～12時 大阪歴史博物館第2研修室
・「難波宮跡をはじめとする上町台地の歴史遺産活用に関する提言」案の検討

「なにわ活性化プロジェクト委員会」委員

委員長	栄原永遠男	大阪市立大学名誉教授・特任教授
副委員長	仁木 宏	大阪市立大学大学院文学研究科教授
委員	吉田 豊	大阪商工会議所地域振興部長
委員	佐々木建史	NHK大阪放送局事業部長
委員	神武磐彦 <small>こうたけ</small>	住吉大社権宮司
委員	吉田明良	四天王寺総務部長・参詣部長
委員	浜田容子	NPO OSAKA ゆめネット所長
委員	池田外美雄	NPO 法人かなえ会理事長
委員	植木 久	大阪市教育委員会文化財保護担当研究主幹
委員	西 良文	大阪市ゆとりとみどり振興局博物館群担当課長
委員	松尾信裕	大阪城天守閣館長
委員	積山 洋	大阪歴史博物館研究副主幹
委員	京嶋 覚	大阪文化財研究所総務企画課長
顧問	脇田 修	(財)大阪市博物館協会会長